

私が捕虜になるまで残った壕は、上勢頭の私の家の所有になっていた山にあった、兵隊が掘った壕でした。

三月二十三日の上陸前の大空襲の日は、私は自分の家の壕にいました。二十五日に山の壕に家族と一緒に移ったんです。そのときの家族は、両親と長男の私と妹と弟二人でした。二十六日に、住民は山原に避難するようにという通達があって、父も母もその決心をしていました。しかし私は、連絡係という意識がありますから、山原に逃げてはならないと思っていました。うちの母は私も行くものと思っただけなんです、いざ家族がたとうとするとき、いや自分は行けないんだと、短剣も軍から渡っているし逃げるわけにはいかないんだと、私は言い張ったんです。すると母は、それじゃ私たちもお前を出征させてからでないとたてないと言い出したわけですよ。結局私一人を残して逃げ出すことがしのびなかつたわけですよ。多分、お前を出征させてから山原に逃げようと、いやそうしたら間に合わない、自分一人残っていても大丈夫だからと、私は言ったんですが、父も母もきかなかつたんです。そういうしているうちに、母の親元の叔父さんたちが、この壕は横穴で頑丈だから一緒に入れさせてくれと、頼みにきたもんだから、一緒になったんです。叔父さんたちは、おじいさんおばあさんも一緒にしたから、すぐに山原に行くのは大変だと、やはり私が出征してから、馬車を出して行こうと、そういうふうに相談は決まったんです。

だから私は、はりきって、いつ出征の連絡があるかあるかと待っていたんです。私がぶらぶらしているとき、ちょうど約一キロ離れたコザの山内という部落に日本軍がいて、その大きな五つ星の鉄

血動皇隊が、私に使役を頼むということだったんです。もう上陸はまちがいないから、山内と上勢頭の間にある石橋をこわさなければならぬと、それで私も一つ星の鉄血動皇隊になってその手伝いをしたんです。

二十八日に、私は二中の一年生と一緒に、敵機が嘉手納・読谷あたりを空襲しているのを、山のてっぺんに坐って見ていたんですよ。すると二人を見つけたのか、四、五機ぐらいつの編隊を組んだ敵機が三十機ぐらいつぎに低空して、私たちの方へ機銃掃射を約十分ぐらいたんです。そのとき、私の被っていた戦闘帽の上の方を弾が貫通したんですよ。そして二人がちじこまっているとき、敵の飛行機が一機落ちたんです。日本軍の高射砲の弾があつたんでしよう。私たちは敵の飛行機が落ちるのを見たもんだから、二中生は自分の壕に逃げて、私はまた落ちた飛行機の方へ走って行っただけですよ。行ってみたら、飛行機はグラマンで、ほんぼん燃えていたんですよ。燃えている側まで行ってみたら、血の垂れている跡があるもんだから、私はその血を追って行ってみただけです。そしたら他人の屋敷の片隅に、包帯の切れっぱしとヨードチンキの壺が捨てられてあつたんです。そのへんを私は何も武器は持っていないのに夢中で探してみましたが、人影らしいものは見あたらないですよ。それで私は近くのキビ畑に石を投げてみたり、もう一度家敷の中を探してみたりしますが、物音一つしないんですよ。それから私は燃えているグラマンの所へ戻ってみました。飛行機は機関銃弾か燃料タンクか何かとときどき小さく爆発しよるんですよ。私は約二十分間そのまま燃えるのを眺めて、や

っと燃えるのがおさまったもんだから、後側からならもう大丈夫だろうと思っただけ、よじ登ってゆっくり降り降り、操縦席のところに覗いてみたら、髪が焦げたような匂いがあるんですよ。人間が焼け死んでいるなあと思っただけですが、毛布が焦げていたんですよ。その毛布をどけてそこいらを探してみたら、伐採用の平べったい鉈なたがあつたんですよ。青竜刀みたいなその鉈を見つけて、私はあの上等があつたと思ひ、それを腰にぶらさげてね、得意になってぶらぶらしていたんです。そのときに、日本兵に発見されたんですよ。でも、もう少しで、私は銃殺されるどころでした。

日本兵は六名でしたが、ちゃんと着剣して構えて、わずか五、六間さきまで近寄ってきていたんです。私がひょっこり見たら、日本兵が抜刀して、きらきらさせて、私に向かって狙いを定めているもんだから、私はあわてて帽子を振ったんですよ。

それから私は日本兵にいろと質問されました。それで私は松田という少尉に見た通りであることを報告したんです。少尉は感心したようにうなずいてから、じゃ命令する、グラマンの翼にある機関銃を取れ、というんですよ。上空では敵機が旋回しているし、兵隊たちは隠れるし、道具はないし、飛行機は爆発するかもわからないのに……。でも私は張りきっていましたから命令に従って、鶴嘴つるはしを借りてきて、飛行機の翼をこわして、機関銃を四門取り出して、そして兵隊たちも手伝ってみんなで部隊に運んだんです。

それから後で、集ってきた人たちも手伝って、機関銃の弾を出したんですが、出しても出してもじやんじやん出てくるんですね。それは馬車の荷台一ぱいありましたよ。部隊ではよくやったと褒めら

れましてね、一階級特進だと言っていました。私は鉄血動皇隊の一つ星でしたから、二つ星になったわけでした。それから部隊長は、君に明日頼みたいことがある、用件は明日発表する、と言っていました。あくる日は、壕からぜんぜん出られないぐらいの空襲でした。そして二十九日の晩ですね、兵隊も入れて四十名、真暗闇ですから誰が誰やら判らないんです。ただ番号だけで呼んで、私たちは地雷を持たされてですね、今の第一ゲート附近、北谷小学校の近くに埋めに行っただけです。みんな地雷を背負って、頭から木の葉を被って行きかけたんです。鶴嘴やシャベルを持って、一列に並んで、縄を引いて、一定の間隔をおいてですね。私は道案内もかねていたので、一番でした。ときどき照明弾があがると、みんな伏せてですね。それから目的地にみんな一緒に穴を掘って、先ず一番から、二番三番と、ひとりずつ埋めてから、一番よし、と帰ってくる、二番よし三番よし、と次々に踏まないように注意されていました。その作業は明け方の四時頃までかかりましたね。

それから後は、昼は一步も壕から出ませんでした。夜は、食糧探しに出たりしていました。私は青竜刀みたいな鉈を持っていましたから、使ってみたい気持ちがあって、それでよくキビ畑にキビを切りに出かけました。

三十一日でした。昼、米軍のちょうど昼食時間の十二時頃ですよ。アメリカは面白いことに、戦争であっても昼食時間は決まっています。艦砲も止むし、空襲もないし、もうその頃から私たちはそのことを感で判っていましたから、その一時間ばかりを

私は利用しようと思ったんです。いまのうちに鶏でもつぶしてこようと思つて、私は自分の家に走つて行つたら、鶏小屋は爆風でやられてめちやくちやになつていて、鶏は屋敷のまわりに逃げていました。その鶏をつかまえるのに時間が経つてしまつて、鶏を三羽つかまえて持つて帰るときは、もう砲弾の中ですよ。その途中で、弾が私の前にとんで来たんですよ。あの弾がもし破裂しておれば、私はまちがいなく死んでいて、いまこんな話もできないわけですが、運がよかつたんですね。ちょうど三メートルぐらい離れたところに、直経四センチ長さ二十五センチぐらいの砲弾がぱつと落ちて来たんですよ。そこはイモ畑の中でしたが、とつぜん耳がつかれて聞こえなくなつたみたいに、熱い風がふつときただけで、私は思わず伏せて、そして起きてみたら弾が目の前に落ちていたんですよ。

それから私は、びっくりして鶏を放り投げたまま逃げて、百メートルぐらい離れたところまで逃げてから、窪みのところで、あの弾がいつ爆発するかなあ、と待つていたんです。おかしいなあ、時限なのかなあ、と長いこと待つていても爆発しないもんですから、鶏がおしくなつて、這つて行つて鶏を取つて壕に帰つたんです。

壕には、もう日本兵はいませんでした。うちの家族と叔父さんの家族だけでした。四月一日はずつと昼中は壕の中にいたんですが、昼休みのとき、私だけ高い木に登つて、海の様子を見ているんです。ああ一ぱいアメリカの軍艦がきているなあ、小さい舟が浜辺の方へ行き帰りにいるなあ、と思つて見ていました。しかしそれが上陸だとは思つていませんでした。三十一日は上陸するところをじやんじやん艦砲射撃していましたが、一日は上陸する所より奥地の

てきなさい、出ればどうもしないし食糧も与える、もし出なければ壕を爆破するんだと、そう言つているから出た方がよいということでした。私は武装した服装でしたから、みんなにすめられて、上着を脱ぎ捨てて、丹前に着替えてすな、そして叔父さんの後につづいてみんな出て行つたんです。

みんな出てみたら、アメリカたちは笑つていました。私の頭はくりくり坊主だったもんだから、アメリカは面白がつて撫でたり叩いたりして、悪戯するんですね。私は驚きながらも、このクソタレと思つていましたね。私のアメリカ兵に対する最初の印象といつたら、ほんとに化物みたいな奴らだと思ひましたよ。ポケットも馬鹿でかいし、鉄兜もぶかつこうだし、誰が上官だかも判らないし、そして黒人にはほんとにびっくりしましたね。それでも私は、チャンスがあつたら彼等の機関銃を奪つてやろうと考えていました。

アメリカ兵がいうには、ここは危険だからみんな浜辺につれて行くつと、叔父が通訳してくれて、みんなトラックに乗せられました。父と私だけは、別のトラックに乗るよういわれました。そこから約一キロメートルの上陸地点に向かつて進み、着いたところは砂辺の収容所でした。そこは周囲に杭が打たれバラ線で囲まれていました。側には医務室代りのテントが二つありました。

私と父はそこに入れられて、どうなることかと、また家族のことを心配していたら、しばらくして家族連れの人たちが入つてきました。私と父が入る前に、すでに二人の捕虜が砂の上にはしゃがんでいました。一人はお婆さんで、もう一人は兵隊らしい男で、その人は裸になつていて下は半ズボンをつけて、バンドはしていませんでし

方を、午前中と午後に分けて、セスナ(偵察機ですな)あれで上空から指令して攻撃しているようでした。

それから私は、もう一度、まだ鶏が家に四、五羽残っているのを取つてこようと思つてすね、夜になつてから出かけたなら、途中ですね、真暗い中に、何か大きな黒いものがあるんですよ。たしかそこには家はなかつたんだがなあ、なんだろう、と私はイモ畑の中に立ち停つて眺めていました。一人は離れて反対側からしやがんで眺めて、それでも何か判らないので、這つて近寄つてみたとき、ぱつと明るくなって、それは戦車だったんですよ。そしたら急に、ライトが動いて、機関銃の音が聞こえたんですよ。私は仰向けに寝てじつとしていたんですが、英語みたいな声が聞こえたもんだから、すぐ崖の下に転げ落ちて、夢中で逃げて、這つて他人の屋敷をくぐりぬけて、やつと自分の壕に帰つたわけです。私は両親やみんなに、へんだつたと、どうもアメリカが上陸しているらしいと、話したんです。みんなびっくりして、じやどうするかと、家族会議したわけですよ。明日、朝にでも確かめてみてから、山原に逃げよう決めてたんです。それでも私は内心一人残るつもりでした。

そして翌朝、七時頃に、叔父さんの子供が便所に行きたいといふもんですから、叔母さんが壕の前の便所につれて行こうとしたら、すでに壕の近くにアメリカがいたんですよ、叔母さんはびっくりして引返してきていました。

叔父さんはハワイにいた人で、英語が話せましたから、こうなつたらどうしようもないと言つて、叔父さんが出て行つて、アメリカと話をしてくれて、私に説明していました。民間人なら、壕から出たね。それから最初に私の父が呼ばれて、アメリカ兵からいろいろと尋問を受けたそうですが、父はとぼけて、日本語はぜんぜん判らんふりしたそうです。そこで二世は癪にさわつたらしく、私を呼んで、父の言葉を通訳しろと言つていましたが、私がわざとちんぷんかんぷんに答えると、お前まで馬鹿かと怒鳴つていました。父は帰され、こんどは私にいろいろと質問しました。

お前は兵隊だったんだろうと、いや学生だつたと、じやどこの学生だつたかと、私は一応ほんとうのことを説明しました。そして、詳しい沖繩の地図を出してみせて、お前の学校の生徒には山部隊の通信隊に配属されたものがある筈だが、知らないかと、訊かれて私はびっくりしてしまつてね。いやぜんぜん知らない、私は何も知らないと答えました。その日の訊問は三時間もかかりましたよ。二世は見えた感じは日本人で、沖繩語は知らないようでした。訊問の間に、すかすようにシーレーションという携帯用の罐詰の食糧を与えられましたね。

一人は帰されて、家族も喜んでいたんですが、私はまた呼ばれたんですよ。行つてみたら、別の将校がまた訊問するんですよ。浦添の高地ですね、その地図を指して、ここには石部隊の何々部隊がいる筈だが、君は知らないか、と何度も質問をあげました。私は嘘をついて、十月十日以後は学校には行かずにずっと家にいたから何も知らない、と、不知を切つたんです。そしたら、トラックに乗せられて、ズケランに行つてすね、そこから双眼鏡でみせて、ちやうどそのとき嘉数の高地を攻撃しているんですよ、あの高地には石部隊が何百名いて、あそこには機関砲と機関銃が何門ある筈だが、

実際にはどうなのか、見たことはないかと、また質問をくり返すんですよ。私はいや見たことはない、何も判らないと答えたもんだから、アメリカも諦めたんでしょうね、それだけで帰されました。

戦況を見せられ、質問が終って帰ったときは、収容所には新しい捕虜が二、三十名にふえていました。それから、怪我人がGMCで運ばれてきたりして、私はその世話をする手伝いをしました。しかし大変だったのは、食事で、米軍は配給はしないし、みんなほとんど食糧を持ってきていませんでしたからね。だから私は二世に頼んで、ちよろどその頃はキャベツとニンジンの時期ですよ、みんなひもじくしているから、畑から野菜を取りに行きたいがいいかと、それじゃ一緒に行こうやと、いうことになって、四、五名で若い女の人も一緒になって野菜を取りに行っただけです。その日は、鍋もないし、みんな生で食べましたよ。そこは砂浜の上ですから、じかに寝るので、明け方は寒くてですね。

三日目になると、捕虜は四、五百名にふえてきました。そこでまた二世に頼んで許可を受けて、みんなで手分けして部落の壕から鍋やら米やらを探し出してきて、ご飯を炊いて、みんなにぎり飯を配給して暮らしましたね。そこには一週間いましたが、つきつきと死人が沢山出て、二、三百体を、私たちは埋める作業もしました。戦車につけたブルドーザーで細長く穴をあけてですね、私たちが死体を運んで並べると、すぐブルドーザーで土を被せてしまいましたね。

それから一週間したら移動ということになって、砂辺から島袋までみんな歩かされましたよ。そのときはもう三千名ぐらいになってたり、ちぎれた手を爪をみて、左右合わせてみたり、それから洗って、認識番号をつけたり、布で包んだり、広場に穴を掘って埋めたりしていました。そしてそこに、一体ずつ十字架を立て、十字架を整然と並べた墓地を作りました。それから、米軍のテントの周辺の溝さらいをしたり、また日本軍の兵器・砲弾を集めて、海上トラックに載せて、海に沈めに行ったりしました。

そういう作業をずっとつづけて、六月の末に避難民が島袋から移動させられるとき、四、五日先にキャンプ作りとして、私たちは宜野座村の福山に送られました。最初の十日間は、毎日山の中に木を切りにやらされましたね。ところがわれわれは、もうアメリカ兵のために働きたくない気持でしたからね、どうせその材木はアメリカ兵が使うのだと思って、また怠けようと思えばいくらでも怠けられたので、山に入ったら、監視の目をのがれて山の下の方で寝てばかりいましたよ。アメリカ兵は、日本の敗残兵をこわがって二、三名かたまって山の上の方にいましたから、われわれは昼食時間のときだけ木を一本持つて行って、また午後一本だけ持つて引きあげましたよ。ところが、後でその材木はわれわれのためのものだと判って、もっと働いておけばよかったと思いました。われわれが切り出した材木で、病院とか孤児院とか、配給所や学校や養老院といった施設を建てたんです。あとの個人個人の家は、みんな自力で造ったんです。その頃になると、MPは厳しくなくなって、昼は一回か二回監視にくるだけでした。夜は絶対に外出禁止になっていました。こっちももう馴れたもので、夜、誰かが島尻に食糧揚げに行こうかという話になると、よし行こうと私たちはたびたび出かけまし

いました。

島袋にきてからは、なんといっても食糧不足が問題でした。兎に角、食糧を探しに行かないと餓死するというわけで、私は日本軍の壕に食糧があるのを知っていましたから、そこへ行って米や罐詰などを取ってきたんです。割当てられて収容された家には、足のぼして坐る余地もないぐらい大畳に何十名も入れられていましたから、食糧はいくらでも必要だったわけです。私は運よく馬を見つけましたから、日本軍の壕から味噌の樽を二十個ぐらい運んだんですよ。その馬は、後でMPが欲しがって煙草四ボールと強制的に交換させられました。ところが面白いことに、その馬はアメリカ兵が近寄ると、あばれていましたね。それから三日目に、男はみんな広場に集まれという命令が出て、一万人ぐらいの中から四十名ぐらい働さざかりの男たちが選び出されて、私も父もその中に入れられ、特別収容所に入れられました。

特別収容所も同じ島袋の民家でしたが、囲いがされていて、普通より大きな一軒家で、その母屋とアサギ(離れ)と馬小屋を使っていました。MPがいつも監視して、いちいち朝夕点呼していましたね。しかしそこでは、食糧の不自由はなく、また誰かはどこからか三味線を探し出してきて、弾いたりして、沖繩歌を歌っている人もいました。私などまだ少年でしたから、夜など二、三名で屋根のぼって遊んでいましたよ。ただ仕事だけは、まったくイヤな仕事でした。朝は六時に起床して、七時半にトラックに乗せられ、今の第一ゲイト近くに行っって、そこでアメリカ兵の死体を洗ったりする仕事でしたよ。頭がないのを、これと合うかなあと、合わせてみ

た。あるとき島尻の壕の中に、米俵やら日本刀を見つけ出して、私は七振り日本刀を米俵の中に突っこんで、手榴弾八十発ぐらいも一緒に運んできました。いざとなったら、日本軍のもし返しのために、それらの武器を役立てるつもりでしたよ。

そうこうするうちに、八月十五日がきて、敗けたことがはっきりしたわけですが、やんちゃのさかりでしたから、夜になると日本刀をさげて手榴弾を二、三発持つて、山の中に遊びに行きましたよ。山の中では、日本の敗残兵二人とも逢いました。その人たちのために、私は一か月ぐらい毎晩食糧運びをしましたよ。それがいつの間にか、日本兵は山の中の約束の場所にこなくなっていました……。

#### 伊礼政子(十八歳) 村役所勤務

私の家族は五名でした。父が明治十三年六十四歳で母が明治二十七年五十歳で、第十七歳と妹十三歳がいて、私は十八歳でした。

三月二十三日の朝七時頃、空襲がはじまったわけですね。自分の家の屋敷内の軒下に壕を掘ってありましたが、その日まではその壕に入っていました。空襲になったので取るのも取らずに、すぐ近くの山の中の壕に移ったわけです。山の中の壕には、土地の所有権とか貯金通帳とか貴重品や、お米とか味噌とかの食糧なども避難させてありました。ただトウトウメ(位牌)は後で運びました。

その日の夕方になって、家に帰ってみたら家は空襲から免れていました。で、夕食を家で炊いて、国頭に避難する準備をすめたわけですよ。みんな一緒に行くつもりでしたが、父が自分の土地から

は離れられないと言いつ出したもんですから、父の面倒を見るために私が残ることになって、母の出身地が今帰仁でしたので、それじゃ母と弟と妹を今帰仁にやろうということに決めなわけです。そこへ姉の夫がちょうど荷馬車で迎えにきましたから、あわただしく、荷物と食糧を二分して、母たちは出かけて、私と父がこの村に残ったわけです。

それから私と父は、三月二十四日の朝早く弁当箱に油味噌なんか詰めてですね、山の壕に行きました。そこへ四人の石部隊の兵隊さんが機銃掃射にやられて負傷したと言って、私たちの壕にとびこんできたんですよ。兵隊さんの話によると、山原に木の伐採に行っていたのが、本部の浦添へ帰るよう命令を受けて帰る途中、敵機にやられたと言っていました。北海道出身のその兵隊さんたちは、父にカンパンと煙草一本を下さったので、父はお礼に黒砂糖をあげて、夕方六時頃に兵隊さんたちは出て行きました。

二十五日に、いよいよ艦砲と空襲が激しくなったので、山の中の壕が危くなり、あとで村有地の多幸山の壕に移った方がよいということになりました。夜になって、もう一度自分の家に行ってみることになりました。壕を出て照明弾の灯りをたよりに家に進むと、すっかり道も畑も変っていて、あちこち大穴ができていました。ようやく家の近くの県道にきたら、県道の松の並木はほとんどへし折られ、あちこちに枝が垂れさがって、ぶきみな感じでした。家の母屋はまだ残っていたけど、以前父が床屋をしていた三坪の瓦葺の家と馬小屋は崩れていて、山羊が三頭焼け死んでいました。これが最後、もう二度とここには帰ることができないのだからと、父は諦め

面で、すっかり痩せていて、以前の勇姿とは打って変わっていました。夕方になって日比さんは壕を出て行きましたが、口数も少なく、元気がなくて、私には日本刀を持ったその後姿が、なんだか淋しそうで、可哀そうに見えました。

それから三月二十七日の夕方、私はバケツを下げて近く山の手の人家に水汲みに出かけました。その家は空家になっていて、誰もいませんでした。その井戸で、私は久しぶりに体を洗い、思う存分水を飲みました。その帰り途中で、一枚のピラを拾いました。飛行機から散布したらしいアメリカのピラでした。南方での避難民の収容状況を撮った写真がのっていました。そして、このように暖く迎えるから、壕から出て降服するようにという意味のことが書いてありました。壕に帰ったら、隣の浜元さんのおばあさんがモッコで担ぎ込まれてきました。それまで毎日食糧を節約して、飲まず食わずの生活でしたから、そのおばあさんは病人になっていました。

三月二十八日には、いざ米軍につかまったときのことを思い、男の人たちはほとんど洋服を着物に着替えていました。父は昭和十七年に戦死した兄の将校の軍服を着ていましたので、私とその服を住民らしく着物に着替えたらすめたのですが、軍服がいいと言張って着替えませんでした。夕方になって、枝を折るような音と馬のいななく声が聞こえました。さてはアメリカがきたのかと思って息を殺してじっとしていると、それは友軍で、嘉手納飛行場を撤退した十数人の兵隊たちでした。そして兵隊たちは、にわかに近くに壕掘りをはじめ、松林に大砲をそなえつけたり、馬を私たちの壕の近くにつないだりしましたので、私たちを守ってくれる兵隊たちがき

て、位牌をふところの中に入れ、私は鍋や釜や食糧などを持ってまた壕に戻り、それから多幸山の壕に移りました。

多幸山の壕は、昭和十九年十月十日直後に父が友人から十円でゆずり受けたもので、更に大工さんを頼んで岩を大きく切り抜いてL字型に掘って、頑丈にできた壕でした。そして家の軒下の壕を一番壕、山の中の壕を二番壕、最後の壕を三番壕と、私たちは呼んでいました。

三月二十六日、朝早く起きてみると、私たちの壕の周辺にある自然壕には避難民がいっぱい入っていました。ほとんど老人と女子供たちばかりで、四十人ぐらいいました。それぞれみんな壕の中に閉じこもって、外には出ませんでした。私と父は、ここは安全だからと言って、戦がすむまで壕の中で暮らすつもりでした。午後の一時頃、駐在の巡査の国吉さんが家族を探して訪ねてこられました。国吉さんの家族は一足先に山原に出かけたあとでした。昨夜炊いたご飯に油味噌を入れてにぎりめしを作り、食事を一緒にしました。

三時頃、一段と砲弾が激しくなって、遠く近く弾が落ちて破裂する音が聞こえました。ここは危いから一緒に山原に行きましょうと国吉さんが誘っていました。父はどこに行っても同じだからと断っていました。国吉さんは夕方になって、山原の方へ出かけて行きました。国吉さんと入れちがいに、北谷小学校に二月末まで駐屯していた石三五九六部隊の曹長である日比さんが訪ねてきました。部隊滞在中には、私たちは壕掘りなど協力したりしていて、父は日比さんと親しい仲でした。その日比さんも、金武に伐採に行つての帰り敵機に追われて、これから部隊に帰る途中だとのことでした。頻

たと、心強く思いました。

三月二十九日に、嘉手納からきたという兵隊が一人やってきました。木の葉で擬装していましたが、訊いたら、東風平村出身の初年兵で、その話によると、沖縄の西海岸は米艦隊に包囲され、日本軍はもう袋のネズミだとのこと、びっくりしました。それまで壕の中にばかりいて、私たちは外のことは何も知りませんでした。

その日の夕方、私は自分の目で確かめるために山の上のぼり、兄の遺品の望遠鏡で海を眺めてみました。そして、海は黒い船でいっぱいになっているのははっきり見え、もうこれで私たちの命もこの島と一緒に短い運命を共にすることが決まったと、胸が詰まる思いでした。

三月三十日、体が頭が虱で痒くなっていました。食事は初年兵から貰ったカンパン二袋と罐詰一個を少しずつ分けて二食しました。中部方面から後退してきた三人の友軍が壕の前を通過しました。飯盒を手に入れている者や靴を手にして素足になっている者もいて、いかにも慌てて逃げる様子でした。周囲にいた日本兵たちはもうどこかへ逃げていなくなっているようでした。

三月三十一日、午後二時頃になると、昨日より機銃掃射も少なく、艦砲も遠くに聞こえたので、私は安心して、外の空気も吸いたくなって壕の外に出てみました。まわりはすっかり変わっていました。隣の壕を覗いてみたら、みんな元気でいたので、一緒に頑張ろうと誓い合いました。

その後で父は、二番壕に土地の所有権証明書とアルバムを忘れたから取りに行つてくると言って、一人で出かけて行きました。一時

間以上経っても帰ってこないで、私は心配して、隣の壕の友だちと一緒に迎えに行こうと思っているとき、父が急いで山を駆け登ってくるのが見えました。父は近寄ってきて、息を切らしながら何やら叫んでいましたが、その非常に昂奮した様子に、私はびつくりしました。急いで壕の中に入れてから、話をよく聞いたら、父は途中で、肌の色が白いのや黒い兵隊たちに手招きされたので、立ち止まって見ていたら、一せいに銃を構えて射撃された、あわてて堤にとびおり、谷間づたいに逃げてきた、と説明しました。父を銃殺しようとしたのがアメリカ人だとはどうしても信じることができなかったので、日本兵の見まぢがいではないかと、私は思っていました。

夕方になって、再び二人で二番壕に行ってみることにしました。照明弾の灯りをたよりに、這うようにして進み、ようやく目的地につきました。途中誰にも出会わなかったけれど、壕の中はすでにあらされた後で、書類やアルバムは残っていませんでした。がっかりして、再び多幸山の壕に帰りました。いよいよ重大なことが差し迫ってきた感じでした。ここにいたら危いと、急に父は言い出し、山原に行くことを主張しました。だけど今になって、そうあわてても、もうどうにもならないし、もう後の祭だと私は言ったんです。そのことで父と私は口論しました。

四月一日も同じ口論をしました。山原にいたる家族のことを思うと、同じ死ぬなら家族とともがいい、と父はしきりに山原と一緒に行くように誘いました。しまいには父は、お前が出ないならわたし一人で行くと言いだしたので、私もしぶしぶ折れて、米軍の上陸も

た。外からは私たちの壕は判らないらしく、隣の壕まで米軍はきて、通りすぎて行きました。そしてその夜は、一睡もできず、緊張の連続でした。

四月三日、お昼頃、また外が騒がしいので隙間から覗いてみたら、歩けない老人を担架で米軍が運んでいるのが見え、歩けない年寄りまでも連れて行って殺すのかと思い、もう恐ろしくなりました。

その後は、もう周囲の人たちは一人も残らず連れ去られたらしく、静かになっていました。いよいよ次は私たちの番だと思ってきましたが、いっこうに連れにくる様子がありませんでした。私たちの壕は、昔がはえ、入口は茅で被われていました。外からは注意して見ない限りほとんど判らなかったので、見落としたのだろうと思いました。後で聞いたんですけれど、捕虜になった避難民の人たちは、私の父が軍服に軍刀を持っていたので、自分たちの身まで危いと思つて、合図しなかったとのことでした。

四月四日も緊張の連続でした。私たちは助かったまま壕の中にいたけれど、食糧もなく、外に出たらいずれ見つかって殺される身なので、淋しく悲しくなって、父も私も泣きました。それでも泣きながら、お互に元気づけ合いました。その日の夕方、同じ部落の町田カメ小母さんが、七輪と米をかかえて、私たちの壕にとびこんできました。心強くなって、大変うれしくなりました。町田カメ小母さんも取り残された一人でした。小母さんの話では、アメリカには通訳の二世がいて、殺すようなことはしないで、安全な所へ連れて行くくらいのことでした。でも私は、それはきつと嘘にちがいない

知らないで、その日の夕方、荷物をまとめて出発しました。

父は軍服を着たままで日本刀に荷物を通してひっさげて、私も荷物を持って、二人でゆっくり山を登り、畑を通りぬけて、上勢頭の山入端さん宅近くまでできたとき、どこからともなく照明弾があがり、ピカッと明るくなったので、麦畑に私たちは思わず伏せました。そしたら、戦車が機関銃をばらばらと撃ちまくりながら、前の道を進んで行くのが見えました。そのとき私は戦車に乗っている黒人兵をはじめ見て、体が震えてきました。それから六、七人の避難民が追われて、泣き叫びながら走って行くのが見えました。私たちは、前に進むこともできず、もとの所に引返すこともできず、そのあたりをうろろる逃げまわっていました。また、機関銃の音が松林の中から聞こえてきました。生きたこどももなく、足の向くまま逃げて、豆畑の中にとびおりました。そこにはしばらく隠れてから、探しまわって、やっともとの多幸山の壕に引返すことができました。

四月二日は、米軍の上陸後なので、空襲もなく、艦砲射撃も遠くに聞こえ、まったく静かな朝でした。米軍は中頭を突破して島尻の方へ行ったのだから、と私は思いました。私と父はすっかり疲れていたもので、父は軍服のまま横になって、私は坐ったままで眠っていました。何時間か経って、目を覚ましたら、外が何やら騒がしいので覗いてみたら、米軍が四、五人立っていて、周りの各壕に向って手招きをしていました。そして避難民がぞろぞろ殺されて出てくるのが見えました。私は驚いて、父を起してそのことを告げました。父は軍刀をすばやく取り出し、身構えて、待ち受けていまし

と思っていました。

四月五日、三人の生活がはじまって、夜になってから、三人で水を汲みに出かけました。どこからラジオの音が聞こえてきました。壕の前には電線がぎしり引かれていました。米軍は裏の山にテントを張ってたてこもっているらしい様子でした。前に行ったことのある人家に行ってみたら、その井戸のつるべがなくなっていたので、持って行ったバケツで水を汲みました。そこで私は、久しぶりに顔を洗ったり体を拭いたりしました。髪には虱がいるらしく、痒くてしょうがなかったので、髪も洗いました。

四月六日からは、アメリカ兵がときどき私たちの壕の前を通っていました。私たちは小母さんの持ってきた米を炊いて飢えをしのいでいましたが、残り少なくなっていたので、一日一食にしています。

四月九日になってから、食糧もつきはてて、もう山原に行つて死ぬつもりで、夜、とうとう壕を出ました。父の服装は前と同じで、軍刀に荷物をひっさげて、三人一緒に歩きました。そのときは、どこをどう通つて行ったか判りません。ただ山の中を歩いているうちに、美里村の登川あたりの道に出ました。通りがかり農業組合の建物が燃えているもんだから、そっちの方に気を取られているとき、すぐ父は足を撃たれたんです。父はひっくり返つて、町田の小母さんは走って逃げてすね、私は逃げるわけにもいかず、父の左足の脛すねの傷を手当てしようと思つて着物の紐でくくっていました。そのときアメリカ兵が銃を持ってあらわれたわけです。それから間もなく小型トラックがきて、軍刀や荷物は取り上げられ、父は担架にのせられて、越来こやく(コザ)につれて行かれたそうです。越来から翌日

泡瀬につれて行かれ、すぐまた呉屋（旧越來村）のアメリカ病院に入院させられたそうです。私は越來で二世からいろいろ訊問を受けて、一緒にいた将校はどうしたかと訊かれました。将校ではなく、私の父です、と私は本当のことを話しました。

泡瀬の収容所には病院もあって、島尻から沢山の負傷した避難民が送られてきました。重傷者は呉屋のアメリカ病院に入れられましたが、軽い負傷者は泡瀬に送られていたようです。でも、手榴弾で背中を怪我して、あっちこっち穴があいて蛆虫が湧いている人もいました。私は避難民の面倒をみる仕事をしていました。アメリカの衛生兵がするのを見て見よう見真似で手伝っていました。蛆虫はピンセットで一つ一つ取り出し、リバーガーゼを傷口にさしこんで軟膏を塗っていました。負傷者の収容所は上江洲小学校でした。そこには、泡瀬出身の十歳ぐらいの子供が、左腕を怪我して入ってきていました。その少年は両親や兄弟を亡くして孤児になっていて、引取り人がいませんでしたので、ずっと後まで私たちになつてそこで暮らしていました。

父も元氣になりまた山原に行った母たちとも逢えるようになったのは、翌年になってからでした。

#### 山川 元 清（十一歳） 小学四年

私は戦争当時は、北玉小学校（当時は国民学校）の四年生でした。私の家は北谷ターブクッ（北谷の田圃）の中にある農家で、牛一頭山羊二頭いましたから、小学校一年のときから、朝夕の草刈

の辺は木が高くそびえてすね、十八メートルぐらいの福木の木が部落には沢山あって、昼でも日がよく通らなくて道は薄暗かったですからね。だから見渡せるというわけにはいきませんでした。

上陸空襲がはじまった三月二十三日は、小学校の終業式の日で、またその日は、彼岸の日でもあるわけです。その日には、お餅やらご馳走など、朝早くから作りますから、お餅か何か食べながら壕に退避したことを覚えています。

その日に、家の三百メートル南の方に百キロ爆弾がおちたんですよ。そのときはほんとに胆を冷やしました。パーンと音がする前にすね、地面に這いつくばっている私の腹をすね、地面がもりあがるようにして、ほんと腹を打つんですよ。そのときはじめて私は空襲のこわさを知りました。爆弾は田圃と道の間におちて、道が半分えぐり取られて、すぐそこは水溜りになっておったんです。

その日には、部落はそうとう被害を受けました。私の実家の父は、昭和十六年に亡くなっていましたから、私はおじいさんおばあさんの家に引取られていました。夕方、空襲が終ったとき、その家から周りの田圃を見たら、いたるところに直径六メートルぐらいの穴が無数にあっていました。また部落の三分の一は焼夷弾で焼けてしまっていました。

部落の家はほとんど茅葺きでしたから、家の側にある福木の葉までがばちばち焼ける音をたてていました。夜になるまでには部落民のほとんどが山の方の壕に移ったんです。三月二十五日、艦砲射撃がはじまってから、私は夜こっそり壕から出て、自分の家に食糧を取りに行ったんですが、道は木が将棋倒しに倒れていて、通れない

は私の担当でした。

昭和十九年の十月十日のことですが、その日の朝、私は県道（一号線）から西側に二百メートルぐらいの所で、草を刈っておったわけです。そのときに、飛行機が編隊を組んでやってきたもんだから、これは妙なもんだなあと思っていて見上げてうちに、私の記憶では那覇から先に空襲をやったと思います。那覇をすつと爆撃やっつてすね、十時頃まで練り返しやっつた後、田舎のこっちの方の嘉手納飛行場を爆撃し、そのときにはすでに那覇はそうとう燃えておったですからね。

空襲がはじまると、うちのおばあさんは私にすぐ帰ってこいと呼んでいたのでしようね、しきりに手真似しながら何やら叫んでいるようでしたから。呼んでも声が聞こえない距離なんですよ。それから私が家に帰ったら、母たちは荷物をまとめたりして避難の準備をしていましたが、私は飛行機の方に気をとられ、庭の木の下に隠れて、半ば遊ぶような気持で空襲を眺めていました。また、当時の県道の東側にウスカガジマル（榕樹）という大きな木があったんですが、私は十時頃からそれに登って空襲の様子を見ておるんです。その日からは、一週間か十日間おきぐらいに、空襲がありました。私は草刈に行つて空襲にあり、キビ畑の中に隠れたりしたことが何度もありました。敵はばあつときて、爆弾を落としてばあつといなくなると、空襲警報をかけたらもう敵は逃げていなくなるという状態がつづいていました。

空襲は直接部落にはきませんでした。嘉手納飛行場の上空には、そのたびにぱつと白い煙がたち昇るのがよく見えました。昔は、こ

ぐらいでした。また鶏小屋に手を入れてみたら、鶏は卵を抱くようにして、全部死んでいました。

二十六日か二十七日に、友軍の兵隊が三、四名うちの壕に見えただけです。その頃には、空襲も艦砲も激しかったですから、あんたがたは山原に避難しなさいと言っていました。そして、うちの家族は十名でしたが、姉さんは（腹違いですが）十七歳でしたので、兵隊がその娘を弾運びに出してくれ、と頼んでいました。おじいさんおばあさんに子供たちばかりで、働き手は母と姉だけです。母はそれではきませんと、ちょうど姉さんは小さい弟をおんぶしていましたが、断ることができたんです。それから夜どうし歩いて、家族みんな山原に向かったんですが、どこも同じだと言って一泊してから、途中からまた引返してきました。そして余所の墓の中に入れて貰いました。私たちの家族と余所の人たちも入れて十六名でした。墓の入口は木の葉で覆うてすね。三日ぐらい経つてから、入口の木の葉の間から、米軍の上陸を見たわけですよ。

米軍が上陸する前に、すでに少数のアメリカ兵が北谷にきていたしと思えない出来事がありました。二十九日か三十日でした。隣の壕（墓）から煙が出るんですよ、もうもうと。そこには年寄りの夫婦が二組入っているの聞いていましたが、ほんとに危いね、こんなぶつそうな時に、イモでも炊いているのかなあ、と思っていました。後で判ったんですが、その二組の夫婦は全滅していたんです。

中に毒ガスが何か爆薬を撃ち込まれて、燃えていたんですね。それから、うちのおじいさんが海の様子を見にと出かけて、小高い所に登りかけたときに、アメリカ兵らしい兵隊たちから小銃で撃たれ

て、肩をかすり傷ていどに負傷して逃げて帰って来ていました。隣の壕の被害とおじいさんの負傷のことから、すでに米軍が上陸していたとしか考えられません。

それから四月一日に、私は米軍が上陸してくるのを目撃しました。私たちの壕は、山の谷間の中間にある墓でしたから、谷間のむこうの海岸はすぐ下に見え、そこから米軍の様子を見ていました。海の方には、谷間から見える水平線までいっぱい軍艦が浮かんでいて、そして海岸にはバージ（浮桟橋）がかけられていました。そのうち海岸に近い山の下の道から、米軍の戦車が通るのが見えしました。米軍の戦車はですね、はじめに砲のついでに戦車が進み、その後には電線のついた電話か何か持った一人の兵隊が隠れたりしながら後からついて歩いていました。そんな戦車が十台ぐらい行っただら、こんどはアングルの砲のついた戦車が始めたんですよ。アングルといえばブルドーザーの歯のついたスコップみたいなものですね。その後から、大きいブルドーザーがどんどんつづいていました。それだけのものが、夕方になると、また引返して行くんですよ。

私たちは、その墓にいてももう危険だということ、一緒にいた余所のおじいさんが下痢をしまして、もう臭くてたまらなくなっていたので、その日の夜引越しの準備をして、すぐに五十メートルぐらい離れた伊礼さんの墓に移ったわけです。そうしたら、北玉小学校の裏の山でアメリカカーを見たという余所の三人家族の人たちもその墓に逃げて来ていました。

そして四月二日、午後二時頃です。うちの姉さんが、はじめの壕

って、それからズケランのナカミーヤという所に逃げました。ズケランの部落の真下を通っているといわれる大きなズケランのトウガマという自然壕に入るつもりで行ったんですが、あせて入口が探せなくて、結局、民家の天井裏に隠れたんです。そこまでたどりつくまでの道程は、戦車が何度も通った跡でこなごなに石が砕けている所や、艦砲で穴だらけになっている所をのぼったりおりたりして、五号線に行きつくまで大変でした。

その天井裏に、みんな寝たつきりで、ほとんど飲まず食わずで四日間隠れていました。井戸があって水はありましたが、食べるものは何もなく、一度だけ夜、近くのキビ畑からキビを取ってきてみんなで食べたぐらいです。三日目になると、さすがにみんな我慢できなくなつて、これからどうしようかと、どこからか命がけて米を探してきてみんなで食べないといけないとか、大人たちは相談していました。それでも出て行くと危険だといって誰も出て行きませんでした。

五日目の昼すぎ、物音がすると思つたら、アメリカカーが下に遊びにきておるんですよ。その家にはレコードが沢山あったらしく、アメリカカーたちはレコードを投げ合ったり、山羊と戯れたりして遊んでおるわけですよ。そのとき、うちの末っ子が泣いてしまつたんですよ。私たちは天井裏のキビガラの上について、入口はキビガラで被せてありましたが、アメリカカーはすぐ入口のキビガラをどけて、曲つた懐中電灯で私たちが何人いるか確認していました。そして入口に近い私から下ろされて、つきつきみんな下ろされたわけです。ところが一人足りないというわけで、アメリカカーは不思議がつてお

の近くに泉があつて、そこへ水汲みに行つて、アメリカカーに見つかつて逃げてきたんですよ。ちようと壕の入口には、夜のうちに洗つてあつた食器類をおいてあつたわけですよ。それを足でひっかけてしまつて、ガラガラ音させたもんだから、アメリカカーは早速追いかけてきてですね、何とかかんとか叫んでですね。私たちがびびくりしてちじこまつて、蚊帳やら蒲団やらを頭から被つていたんですよ。そしたら、シューッと音がして、何事も無い、またシューッと音がして何事も無い、三回目にはパーンと大きな音が出て、煙がもうもうとたちこめたわけです。

その墓は古墓で、自然の岩穴に作つてあつたもんだから、ちょうど換気穴みたいに、三メートルぐらい上の方に斜めに穴があいておるんですよ。煙はそこから逃げてですね。一時はみんなごほんごほん咳をしたんですが、手で鼻をおおて大きな樽の黒砂糖を取つてなめたり、蒲団の中にもぐつたりして、十三名みんな無事に助かつたんです。助かつた理由はもう一つありました。墓の入口近くに爆風返しといて、土を積んであつたのがよかつたんです。それがなかったら、まともに中で爆発して、中には着物やら蒲団やらいろいろなものが入っていますから、それらが燃えておしまひだつたでしょう。爆風返し土の側においてあつた薪は、全部燃えつきつてしまつていました。

夕方になって、艦砲も終り、しんと静かになって暗くなったもんですよ。墓の中からみんな出たわけです。そしたら、墓の入口の石に燐光がついて光っているもんだから、みんな腰をぬかし、これに一寸でも触れたら死ぬんじゃないかと恐れ、大変だと思つた。戦後判つたことですが、前からそこにいた余所のおばあさんは、キビガラの中に隠れて出てこなかつたそうです。それからアメリカカーは、私たちにお菓子やいろんな食べものを上げよつたんです。でも私たちは、毒が入っていると思つて、誰一人食べようとしませんでした。アメリカカーたちは食べてみせよつたんですが、それでも食べませんでした。

そこからは全員歩かされて、北谷村の玉寄部落のはずれの、米軍の三、四十門もある野砲陣地のある所に、つれて行かれたとき、私たちはほんとにびびくりしましたですね。そこでは、野砲がどんどん火をふいて唸っていたわけです。そしてその広場には捕虜が集められていました。そこから避難民はまとめてトラックに乗せられて、つれて行かれました。みんな心配のし通しでしたが、今のハングビ飛行場の真上あたりの、アルハのシーという岩の上の方の収容所に私たちは収容されたわけです。

そこには親戚の人たちも沢山いました。私たち家族は全滅したとみんな信じこんでおつたようです。みんな私たちが助かつたことを不思議がつたり珍しがつたりしていました。そこでは、一日に小さい握り飯を一個しか与えられなかったため、不足の分は自分たちで周りの畑からイモを掘り出して食べました。

三日目にそこから歩かされて、野嵩の先の登又の民家に移されたわけです。そこで一週間すごしました。そこでは米軍から戒厳令がしかれて夜は外出禁止でした。少しでも屋敷の外に出たら射殺されるんですよ。一軒の家に二十名ぐらい入れられていましたが、夜は友軍の要塞砲の弾がとんでくるんで、私たちは屋敷内の壕の中ですご

しました。また、間近くで砲声やら機関銃の音が聞こえてきました。夜は絶対に出られないというのに、余所のおばあさんが外出して、蜂の巣みたいに機関銃でやられて死んだという話を聞きました。そのおばあさんは、誰何されても言葉が判らず止まらなかったんでしょね。また、壕の中にいて、二度ばかり遠くの方から微かに「突撃！」という日本兵の声を聞いたことがあったんですよ。友軍の斬込み隊がすぐ近くまで来ていたと思います。それから昼間、珍しい光景を見ました。馬や牛や山羊が、それぞれ集団を作って逃げて行くのを見たことがあります。

一週間にそこから、年寄りだけはG M Cに乗せられてコザの安慶田<sup>あけだ</sup>に收容され、女子供の残りの家族は具志川村の前原に移されたわけです。私たちは前原に行きましたが、おじいさんとおばあさんは安慶田に行って別れ別れになったんです。だからおじいさんたちのことが心配で、私と姉さんは前原からときどきバラ線を越えて、食糧を持って逢いに行っただけです。また私は一人でときどきあっちこっちに越境して食糧を探しに行きました。粟や豆など畑へ取りに行ったり、焼け残った空家や壕の中から、味噌や砂糖なども取ってきました。そしてしばらくおじいさんたちと一緒にいるとき、みんなそこから石川にやられるということだったので、山原では餓死がよく出ているという話を聞いてびっくりして、おじいさんたちを誘って夜こっそりバラ線をこえて、前原に移ったわけです。

越境するときは、ときどき女の人たちが黒ん坊に追いかけられるのを見たことがあります。また追われたとか、襲われたとか強姦されたとかいう話をよく聞きました。だから私は身の安全を考えました。ただ後からは、米軍の横暴にみんな悩まされてきました。私たちがたびたび食糧探しに出かけた所は、美里村の本部落でした。そこには裕福な庭が多かったんでしょね、瓦葺の琉球イヌマキ(チャーギ)で造られた立派な家が多かったですよ。そこへアメリカカーが遊びにきて、家を焼いたり、あるいは家の周りの柱を全部切り倒して、中の一本だけの柱を残して、綱をひっかけて引張ってばあッと一度に倒したりしていました。そのアメリカカーたちは、パンツなんかつけていませんでした。どういわけか真っ裸ですよ。女があらわれたら、いちごころですよ、すぐやられて。実際に強姦を見たことはありませんでしたが、待ち構えているのは見ました。崩した家の近くで日なたぼっこしていたり、ぶらぶらしていたりして、待っているようでした。その近くには米軍キャンプがあつて、また美里の部落の裏あたりには、山原から安慶田の收容所に、食糧を求めて越境してくる集団がよくあらわれたそうです、そういう人たちの中には、黒ん坊に強姦されたものが少なくなかったそうです。話は何回も聞きました。アメリカカーは銃を構えていて、どうにもならなかったという大人の話をつたひびき聞きました。

て、馴れてもいましたから、たいてい一人で越境しました。私と姉さんと一緒に越境したとき黒ん坊に追いかけられて、必死に逃げ、どうやら二人とも難をのがれたことがあります。私一人だとそんな心配はないし、むしろシヨリー、シヨリーと呼ばれてアメリカカーから可愛がられて、いろいろの物資を貰ったりもできたんです。私は米軍のランニング一枚を着ていて、それはスカートみたいにくままで届く恰好になっていたの、おかしかったですよ。安慶田と照屋の間に橋があつて、その近くに池のような川があり、その水は飲みな使っていました。下の方は洗濯に使って、上の方は飲料水でした。その川の近くにバラ線が張られており、それは收容所と米軍キャンプとの境界線ですが、そこから黒ん坊がたびたび入ってきました。助けてくれえという声を聞いて、男の人たちが棒を持って走って行くのをよく見受けました。助けてくれえと叫ぶのが聞こえたら、部落総出で、ちゃんと棒を準備してありましたから、飛び出して行って黒ん坊を叩くというようなあんばいでした。MPにも黒ん坊のことは手におえず、取締るだけではきかないもんだから、そこに入ってくるものはどんなことをしてもいいという達しを出してあったようです。そして一人の黒ん坊は、リンチにあつて、半殺しにされ、自分でバラ線を越えたそうですが、そこでそのままぶつ倒れて死んだそうです。それは放ったらかしにされているうちに、白骨になっていました。その白骨は私も現に見ました。

前原でみんな一緒になつてからの生活は、それほど苦しくはなかったんです。食糧は比較的豊富でした。アメリカカからの配給もあつ